学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	村 田 透
2. 審査委員	主 査：連大教授（滋賀大学） 新 関 伸 也 副主査：連大教授（上越教育大学） 松 本 健 義 委 員：連大教授（滋賀大学） 中 村 史 朗 委 員：連大教授（滋賀大学） 岳 野 公 人 委 員：連大教授（岡山大学） 清 田 哲 男
3. 論文題目	「造形遊び」における子どもの学びの生成に関する研究
4. 審査結果の要旨	<p>論文提出による学位申請者 村田 透 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：令和5年2月5日（日） 14時00分～16時30分 場 所：滋賀大学教育学部 講義棟2階 第24講義室（オンライン形式を併用）</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>(a) 学位論文の構成</p> <p>本論文は、全5章で構成している。</p> <p>第1章 問題の所在，研究の目的，方法，研究の構成及び意義</p> <p>第2章 「造形遊び」における子どもの学びの生成</p> <p>第3章 多様な他者（教師や保育者，友達）と協働的・対話的・状況的につくりだされる「造形遊び」における子どもの学び</p> <p>第4章 複数回にわたる「造形遊び」における子どもの学びの生成の変遷</p> <p>終 章 研究のまとめと教育貢献</p> <p>(b) 学位論文の概要</p> <p>本研究の目的は、「つくる過程（つくり，つくりかえ，つくる）」そのものを楽しむ特徴がある図画工作科「造形遊び」における子どもの学びの生成を明らかにすることである。研究の方法として，身体論，記号論，言語論，発達論，自己・他者論，構成主義の学習理論などの学際的な諸理論を援用して理論構築をするとともに，「造形遊び」の実践事例について，相互行為分析，エピソード記述，エスノメソドロジーによる現象学的アプローチを用いて質的分析を行っている。</p> <p>第1章では，問題の所在，研究の目的，方法，研究の構成及び意義を記している。</p> <p>第2章では，西野範夫の「造形遊び」の学び，木村敏の「生命論，自己論」，丸山圭三郎の「＜意味＞化の円環運動」を基盤として，「造形遊び」は子どもが生きる意味と自らの存在をつくりだす人間の根源的で創造的なく生命の実践という「造形遊び」における子どもの学びの生成の基礎理論を示している。さらに，小学生や幼児を対象とした3件の実践事例の質的分析をして，「造形遊び」におけるアクチュアルなく自己と＜意味＞の共起的・円環的な生成など，子どもの学びの生成の構造を示している。</p> <p>第3章では，第2章を踏まえ「造形遊び」における子どもの学びの生成にかかわる大人の働き，つまり多様な教師や保育者，さらに子ども同士など，他者との関係性について浜田寿美男の「私」の成り立ちと鯨岡峻の大人の「育てる働き」を基盤としつつ，幼児を対象とした2件の実践事例の質的分析をしている。それらの成果として「造形遊び」において子どもは，大人の「養護の働き」と「教育の働き」，つまり「育てる働き」を支えとした多様な他者との協働的・対話的・状況的なかわりを通して，「自己充実欲求」</p>

と「繋合希求欲求」を満たしながら学びを生成する関係性の構造を示した。また、「造形遊び」における自らの学びに関する省察と評価を明らかにするため、G・H・ミードの「社会的自我」とD・A・ショーンの「認識論(<行為の中の省察>)」を基盤として、同様の実践事例の質的分析をしている。さらに、「造形遊び」において子どもは多様な他者との協働的・対話的・状況的なかわりを通して学びを生成する中で、問題を発見し、解決することを試み、自らの学びを行為の中で省察し、学びの妥当性や有益性を実感・評価するという、「造形遊び」における省察と評価などの思考過程を示している。

第4章では、第2章と第3章を踏まえ、複数回にわたる「造形遊び」の参与観察で、子どもの学びの生成過程を明らかにするため、Y・エンゲストロームの「拡張的学習」を基盤として、小学生や幼児を対象とした3件の実践事例の質的分析をしている。複数回の「造形遊び」の参与観察を通して、子どもは多様な他者と協働的・対話的・状況的に学びを生成しながら、過去を想起し、未来を思い描き、直面する現在の状況から問題を設定して、解決を試みている。そこでは自らの学びの妥当性や有効性を省察して評価し、新たな学びをつくり出すという、過去と現在、そして未来へとつながる学びの生成過程を示している。このような学びの生成を通して、子どもは「造形遊び」を社会的で生産的な行為とするとともに、自身が関与する「造形遊び」という学習活動に関する概念を、組織的に豊かで具体的表現をもつ論理的概念へと生成することを示している。

終章では、本研究の成果をまとめ、教育貢献を示している。教育貢献の第一は、本研究の成果は、図画工作科の学習活動において子どもが資質や能力を一体的に働かせて「生きる力」を育む具体的な姿を示したこと。第二に、本研究が明らかにした「造形遊び」における子どもの学びの生成の構造は、幼児期の教育と小学校との円滑な接続を実現するために資すること。第三に、大学教員、小学校や保育の場の教職員らによる「題材開発、実践、観察、分析、考察」を軸にした共同研究は、学校教育と教員養成を連続的な教育実践学研究フィールドとして位置付ける具体的なあり方を示したこと。以上により、本研究の成果とアプローチは、個別的な学びと協働的な学びの往還による「生きる力」を育む学習活動の実現、および「生きる力」を育む学習活動を実現するための学びの共同体づくりに資すると記している。

2. 審査経過

(a) 独創性

本研究は、図画工作科「A表現」の内容の一つである「造形遊び」を「子どもが生きる意味と自らの存在をつくり出す人間の根源的で創造的なく生命の実践」と位置付けて、「造形遊び」における子どもの学びを研究する意義を示すとともに、子ども同士の相互関係に加えて、子どもと大人との相互関係に着目した学びの生成、子どもが自らの学びについて省察して評価する有様、複数回にわたる「造形遊び」の参与観察を通して浮上させた学びの生成過程など、先行研究が明らかとしていなかった内容に取り組んでいる。また、本研究は幼小接続の視点をふまえ、小学生や幼児を対象とした内容の異なる8件の実践事例の質的分析により、多様性・多義性をみせる子どもの学びを具体的に示すとともに、各事例に共通する子どもの学びの生成の構造を明らかにした。以上のことから本研究の目的、研究方法、結論には独創性が認められる。

(b) 発展性

本研究は、子どもが教師や保育者、友達など多様な他者や材料・用具などと相互作用・相互行為をし、資質や能力を一体的に働かせて自らの見方、感じ方、考え方、表し方をつくり出す学びとするとともに、学びの場、つまり共に生きる社会をつくり出すことを明らかにした。よって本研究の成果は、「造形遊び」のみならず、図画工作科や各教科等の学習活動において、子どもが個別的な学びと協働的な学びを往還して「生きる力」を育むとなど、子どもの学びに関する理論や実践への発展が期待される。

(c) 学校教育の実践への貢献

①本研究の題材開発・実践・観察・分析・考察によるアプローチは、子どもの学びを明らかにする筆者を含めた大学教員、小学校や保育の場の教職員らによる共同研究で、開かれた学校運営を通じた学びの共同体づくりに資する。

②平成20年の学習指導要領改訂から現在に至るまで、学校教育現場における学習活動はコンテンツ・ベースからコンピテンシー・ベースへの転換が求められている。本研究で明らかにした子どもが資質や能力を一体的に働かせて自らの見方、感じ方、考え方、表し方をつくり出す学びの有様は、コンピテンシー・ベースの図画工作科・美術科の学習活動に関する理解や実践に資する。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 村田 透 の提出した学位論文が、「博士(学校教育学)」の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。